

なぜ日本の共同体に
キリスト教が必要なのか？



閉塞日本を変える キリスト教

公共神学の提唱

稲垣久和、水山裕文 共著

かつて世界を席卷するほどの経済大国だった日本は、いま急速に劣化している。その象徴ともいえるのが、福島原子力発電所の爆発であると著者は指摘する。建設経緯や事故対応を振り返ることで、日本社会全体に通じる問題点を指摘し、その弱点を補うものとして、キリスト教が貢献できることを本書で訴える。

稲垣久和（いながき・ひさかず）

1947年生まれ。東京基督教大学名誉教授。1975年東京都立大学大学院博士課程修了（理学博士）。CERN（ジュネーブ欧州共同原子核研究所）研究員を経て哲学・神学に転向する。アムステルダム自由大学哲学部、神学部で研究員、客員教授を経て1990年から東京基督教大学教授を勤め2022年に退職。著書に『宗教と公共哲学』（東京大学出版会、2004年）、『働くことの哲学』（明石書店、2019年）など多数。

水山裕文（みずやま・ひろふみ）

1971年生まれ。東京大学経済学部卒業後、1995年、ボストン・コンサルティング・グループに入社。その後、ベンチャーキャピタルを経験して、複数回の起業を行ってきた。国内、海外を含め4回の上場を主導、経験。2022年に東京基督教大学に入学、2023年に東京基督教大学大学院に飛び級で進学。

四六判 192頁 定価1,760円(本体1,600円+税)

ISBN978-4-264-04456-7 C0016

いのちのことば社 卸コード 08570